

子どもの生活の現状と課題
——首都圏近郊の一都市調査の分析から——

斎藤 哲瑯*・本郷 健**・藤原 昌樹***

The Present Situation and Issue on the Child's Life
Survey and Analysis of a City of the Metropolitan Area

Tetsuro SAITO, Takeshi HONGO and Masaki FUJIWARA

要 旨

最近、子どもたちの自立心や社会性の欠如等が指摘されている。その背景には各種の体験不足があると考え、調査をとおして子どもたちの生活の様子や意識などを捉えるとともに、家庭、学校、地域社会などとの具体的な連携方策を探ることを目的とした。

子どもたちにとって最も重要である家庭が、「家庭が楽しくない」「どちらともいえない」と否定的な回答が約3割、また、学校においては、「楽しい理由」の9割が「友だち関係」を挙げ、家庭や学校における人間関係が極めて重要であることが明らかになった。

さらには、子どもたちの日常生活の過ごし方などが極めて限られていること、自然体験や生活体験の不足、そして、依頼心が強く自己中心的な傾向のある子どもは、生活能力、思いやり、人間関係などにおいて弱い傾向にあることも判明した。

キーワード：家庭，子ども，体験活動

*教授 教育社会学

**教授 情報教育学

***講師 スポーツ社会学

1. 調査方法及び調査対象

1) 研究目的

本調査は、東京近郊における一都市（都心から約1時間、人口13万人）を取り上げ、現在の子どもたちの現状を把握し、子どもたちの持つ課題を、健康、自立などの視点から明らかにすることを目的とする。

2) 調査対象者 小学校5年生 中学校2年生 高校2年生

3) 調査時期 平成15年5月12日から5月30日

4) サンプルの抽出・調査方法

標本抽出にあたっては市内の小中高等学校に依頼し、小学校は3クラス以上、中学校は対象学年の2～4クラス、高校は3～4クラスを抽出してもらい、クラス単位で実施。抽出は学校に任せた。

5) 回収標本数

表1 アンケート回収結果 (%)

対象者	対象者数	回収数	回収率
小学校5年生	597	587	98.3
中学校2年生	609	580	95.2
高校2年生	563	519	92.2
計	1,769	1,686	95.3

2. 分析及び考察

2-1 子どもの生活環境

1) 子どもの居場所としての家庭

① 家庭は楽しいか

まず、子どもたちの安心できる居場所としての家庭の状況を探るため、「家庭は楽しいか」と質問を用意した。表2は学年別に集計した結果である。

その結果、「とても楽しい」32.9%、「まあ楽しい」37.4%、「どちらとも言えない」が20.1%、「あまり楽しくない」が6.5%、「全く楽しくない」が3.1%のようになり、70.3%は「家庭が楽しい」と答えるが、「家庭が楽しくない」は9.6%となった。また、「どちらとも言

子どもの生活の現状と課題

えない」と答える子どもが20.1%おり、その内訳は、小学校5年生が11.7%、中学校2年生が22.2%、高校2年生が27.1%と学年の進行と共に増加している。これに、「家庭が楽しくない」を加えてみると、小学校5年生14.8%、中学校2年生32.1%、高校2年生43.6%となり、高校生の半数近くが消極的な回答といえるのである。

このように、現代の子どもの家庭に対する満足度は、学年が進行するに従って減少し、高校2年生ではおよそ半数の子どもが家庭に対して楽しいと言えない状況に置かれていることが分かる。子どもの心の成長にとって根本的な拠となる家庭への満足度が以上のような傾向にあることは、この後の分析において注視しておかなければならない。

表2 家庭は楽しいか

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
とても楽しい	54.9%	28.1%	13.7%	32.9%
まあ楽しい	30.2%	39.8%	42.7%	37.4%
どちらともいえない	11.7%	22.2%	27.1%	20.1%
あまり楽しくない	2.6%	7.1%	10.0%	6.5%
全く楽しくない	.5%	2.8%	6.5%	3.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

②家庭が楽しい理由

表3は「家庭が楽しい理由」について、学年毎の回答結果を示したものである。全体では、「家族の会話が楽しい」が70.5%、「親が自分の話をよく聞いてくれる」が52.5%となり、この2項目が家庭の楽しい主たる理由となっている。これらの回答割合は、学年によってもほとんど変わらないことが分かる。

表3 家庭が楽しい理由

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 両親の仲がよい	30.7%	30.9%	39.3%	32.8%
2. 家族の会話が楽しい	75.2%	70.4%	62.5%	70.5%
3. 親が自分の話を良く聞いてくれる	50.9%	55.1%	51.7%	52.5%
4. 親に何でも相談できる	34.6%	21.0%	19.5%	26.3%
5. 自分を信じていてくれる	26.7%	18.5%	16.9%	21.6%
6. 友だちを大事にしてくれる	20.0%	18.5%	15.4%	18.4%
7. その他	5.9%	8.3%	11.2%	8.0%

③家庭が楽しくない理由

また、「家庭が楽しくない理由」について質問してみると、「親が口うるさい」が最も多く69.8%，以下、「家族の会話が楽しくない」が39.6%，「自分を信じてくれない」が28.9%と続いている。学年ごとに比較すると、「家族の会話が楽しくない」や「親が口うるさい」が学年の進行とともに減少する。一方、「自分を信じてくれない」は学年による変化は少ないことが分かる。

表3および表4の結果からは、家族内におけるコミュニケーションが第一に影響していることが推察できる。ただ、学年が進むに従って家庭が楽しくないという子どもが増加する傾向がみられるのに対して、その重要な要因と考えられる「家族内の会話が楽しくない」の数値が逆に減少することを考えあわせると、双方に矛盾が感じられ、その陰には隠れた要因の存在を示唆するものといえよう。

その要因としては、他の「両親の仲が悪い」、「友だちを大事にしてくれない」などとの関連性が考えられ、今後の課題としたい。

表4 家庭が楽しくない理由

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 両親の仲が悪い	.0%	9.6%	21.3%	14.8%
2. 家族の会話が楽しくない	52.9%	42.3%	35.0%	39.6%
3. 親が自分の話を聞いてくれない	29.4%	34.6%	15.0%	23.5%
4. 親が口うるさい	70.6%	78.8%	63.8%	69.8%
5. 自分を信じてくれない	29.4%	30.8%	27.5%	28.9%
6. 友だちを大事にしてくれない	.0%	11.5%	12.5%	10.7%
7. その他	29.4%	17.3%	30.0%	25.5%

2) 子どもの居場所としての学校

①学校は楽しいか

家庭とともに多くの生活時間を占める学校に対する心地よさや安定感について検討するため、「学校は楽しいか」と質問してみた（表5）。その結果、「とても・まあ楽しい」が68.7%，「どちらとも言えない」が17.6%，「あまり・全然楽しくない」が13.7%となった。

本質問に対して「どちらとも言えない」という回答を消極的的回答傾向として処理していくと、全体の31.3%となり、3人に1人は学校が楽しいところとなっていない傾向にあることが分かる。この消極的的回答について学年に対する変化をみていくと、小学校5年生22.0%，中学校2

子どもの生活の現状と課題

年生 27.0 %，高校 2 年生 46.8 % となり，学年が上がるにしたがってこの傾向が強くなるとともに，高校生では半数近くが学校が楽しいところとなっていない傾向が強く感じられる。

特に「とても楽しい」は，小学校 5 年生が 41.6 % であるのに対して高校 2 年生では 12.3 % と激減している。

表 5 学校は楽しいか

	小学校 5 年生	中学校 2 年生	高校 2 年生	合計
1. とても楽しい	41.6%	31.7%	12.3%	29.2%
2. まあ楽しい	36.4%	41.4%	40.9%	39.5%
3. どちらともいえない	12.0%	18.3%	23.1%	17.6%
4. あまり楽しくない	5.7%	6.6%	16.6%	9.3%
5. 全然楽しくない	4.3%	2.1%	7.1%	4.4%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

②学校が楽しい理由

そこで、「学校が楽しい理由」について質問してみた。その結果，最も多かったのが「仲良しの友だちがたくさんいるから」で，小学校 5 年生が 91.9 %，中学校 2 年生が 92.6 %，高校 2 年生が 91.3 % となり，全体では 92.0 % になった。学年による違いはほとんどないことが分かる。

また，学年ごとの違いをみると，小学校 5 年生では「調べたり実際にやってみる授業が多いから」の 33.4 % が 2 位に，「クラスや児童会などいろいろな活動が出来るから」の 29.9 % が 3

表 6 学校が楽しい理由

	小学 5 年	中学 2 年	高校 2 年	合計
1. 仲よしの友だちがたくさんいるから	91.9%	92.6%	91.3%	92.0%
2. 上級生がやさしいから	16.5%	29.2%	19.0%	21.8%
3. 放課後自由に遊べるから	22.5%	15.5%	40.3%	24.0%
4. 規則がきびしくないから	6.7%	8.4%	14.2%	9.1%
5. 勉強がよくわかるから	28.1%	17.4%	9.5%	19.8%
6. 先生が何でも相談にのってくれるから	12.1%	7.1%	8.7%	9.4%
7. 先生が好きだから	20.0%	13.5%	9.5%	15.1%
8. 調べたり実際にやってみたりする授業が多いから	33.4%	19.2%	5.1%	21.5%
9. クラスや児童会などでいろんな活動ができるから	29.9%	25.1%	11.5%	23.8%
10. その他	10.2%	25.3%	22.1%	18.6%

位を占めており、学習活動の楽しさが学校を楽しいものにさせている傾向がうかがえる。一方、中学校2年生では「上級生がやさしいから」が29.2%で2位にあり、友だち関係の良さが学校を楽しいものにさせていることが分かる。高校2年生では「放課後自由に遊べるから」の40.3%が2位で、遊びや友だち関係が重要となっていることが分かる。

このように、学校を楽しくさせている共通要因は友だち関係が極めて重要な要素であることが指摘できる。

③学校が楽しくない理由

次に「学校が楽しくない理由」をみると、「家にいた方がいいから」の58.5%が最も高く、消極的かつ静的な子どもたちの姿が浮かんでくる。学年別にみると、小学校5年生は「いじわるをされたことがあるから」の50.9%が高く、友だち関係の気まずさが影響していることが分かる。中学校2年生も同様の傾向があるものの、高校2年生では「規則がきびしいから」(35.7%)が2番目の理由となっており、学年によって理由の違いが明らかになった。

表7 学校が楽しくない理由

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 仲よしの友だちがいないから	7.0%	18.8%	19.6%	16.1%
2. いじわるされたことがあるから	50.9%	45.8%	13.4%	30.4%
3. 規則がきびしいから	17.5%	35.4%	35.7%	30.9%
4. 勉強がよくわからないから	24.6%	39.6%	27.7%	29.5%
5. 先生が相談にのってくれないから	1.8%	4.2%	6.3%	4.6%
6. 好きな先生がいないから	21.1%	18.8%	22.3%	21.2%
7. 学校が忙しすぎてゆっくりできないから	42.1%	41.7%	25.9%	33.6%
8. 家にいた方がいいから	70.2%	41.7%	59.8%	58.5%
9. その他	21.1%	22.9%	33.9%	28.1%

3) 子どもたちの放課後の過ごし方・交友関係の視点から

①放課後の過ごし方

「放課後の過ごし方」について比率の高いものを見ると、全体では「部活」56.8%、「テレビ」が33.5%、「勉強や塾」が33.3%などが上位にあることが分かる。その内訳は、小学校5年生では「友だちと外で遊ぶ」が49.7%、「勉強や塾」44.3%となり、他の学年と比べて友だちと外で遊ぶ行動が特徴的であった。中学校2年生では、「部活」が一番高く89.3%、「勉強や塾」が44.2%となる。高校2年生では、中学校と同じく「部活」が一位で43.9%、「テレビ」

子どもの生活の現状と課題

が39.5%と続き、高校生の放課後の過ごし方が多様化していることが分かる。ただ、「勉強や塾」の8.2%は、小学校5年生の44.3%、中学校2年生の44.2%に比べて極端に少く、高校生の学校以外での学習離れが顕著に表れている。

表8 放課後の過ごし方

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 友だちと家の中で遊ぶ	37.7%	9.8%	12.1%	20.2%
2. 勉強や塾	44.3%	44.2%	8.2%	33.3%
3. 部活	35.6%	89.3%	43.9%	56.8%
4. 友だちと外で遊ぶ	49.7%	11.2%	30.7%	30.5%
5. 読書	9.8%	6.5%	8.8%	8.3%
6. ゲーム	32.2%	21.3%	21.7%	25.2%
7. テレビ	25.0%	36.7%	39.5%	33.5%
8. パソコン	6.0%	16.5%	10.9%	11.2%
9. マンガを読む	15.9%	17.4%	18.8%	17.3%

②遊び友だち

「遊び友だち」については、「同じくクラスの子」が全体の69.6%で最も高かったが、学年が進行するに従って減少する傾向がみられる。2番目は、「違うクラス子」が55.6%、「クラブや部活の子」が40.9%と続く。学年ごとの特徴は、小学生はクラス友だちが中心であるのに対して、中学校2年生ではクラブや部活の友だちが中心となり、高校2年生では、幼稚園から中学校までのいずれかの学校で一緒だった友だちとの関係が大切にされている様子がうかがえる。学年によって特徴的な傾向がみられた。

表9 遊び友だち

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 特に遊ぶ子はいない	4.0%	4.3%	5.2%	4.5%
2. 同じクラスの子	81.8%	69.0%	56.3%	69.6%
3. 違うクラスの子	55.8%	62.3%	47.7%	55.6%
4. 近所の子	32.3%	12.0%	23.2%	22.5%
5. 塾でいっしょの子	7.3%	8.3%	1.6%	6.0%
6. クラブや部活の子	19.1%	69.9%	32.5%	40.9%
7. 前の学校や幼稚園でいっしょの子	9.4%	14.6%	41.5%	21.0%
8. その他	7.5%	3.3%	7.6%	6.1%

4) 子どもたちの健康状態

ここでは子どもたち自身が感じる健康について質問してみた(表10)。その結果を「よくある・時々ある」としてみると、「疲れやすいことがある」が72.9% (小62.0%, 中77.4%, 高79.8%) となり、どの学年においても一位を占めている。次に、「イライラすることがある」が65.1% (小59.4%, 中64.4%, 高72.0%), 「やる気がおきない」が60.4% (小44.8%, 中64.0%, 高73.8%) と続いている。小学生5年生と中学生2年生では、「疲れやすい」と「イライラする」がともに上位2位までを示しているが、高校2年生になると2位に「やる気がおきないこと」がくることが特徴的であるが、いずれにしても、どの学年でもこの3項目が上位を占めているのである。

全体的には、学年が上がるにしたがって比率が高くなっており、特に高校生では「疲れやすい」79.8%, 「やる気がおきない」73.8%, 「イライラする」72.0%の3項目が際だって高く相当のストレスを感じていることが推察される。これらのことから、子どもたちが成長するに従って、生活のさまざまな場面における意欲あるいは興味に関わる「やる気」が減退して行くことを明白に示したのものとして捉えるべきことで、子どもの成長にとって大変由々しき状況と言えよう。

表10 子どもたち自身が感じる健康状態～「よくある・時々ある」～

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 夜眠れないこと	46.4%	39.9%	51.8%	45.7%
2. 疲れやすいこと	62.0%	77.4%	79.8%	72.9%
3. 食欲がないこと	27.4%	32.6%	41.1%	33.3%
4. おなかが痛いこと	44.1%	51.4%	49.6%	48.3%
5. 肩がこること	26.7%	43.2%	48.7%	39.2%
6. 立ちくらみがすること	17.7%	49.7%	56.1%	40.6%
7. 頭が痛いこと	35.6%	43.5%	43.3%	40.7%
8. イライラすること	59.4%	64.4%	72.0%	65.1%
9. 下痢をすること	13.9%	14.0%	25.5%	17.6%
10. やる気がおきないこと	44.8%	64.0%	73.8%	60.4%
11. カゼをひくこと	34.4%	29.1%	38.9%	34.0%

5) 親子の信頼関係

「親子の信頼関係」について見てみよう。まず、子どもが親をどのくらい信用しているかを表11に整理し、逆に親からどのくらい信用されているかと思っているかを表12にまとめてみ

子どもの生活の現状と課題

た。

まず、親を「とても・まあ信頼している」が79.1%、「よくわからない」12.3%、「あまり・全然信頼していない」8.6%となるが、「よくわからない」を消極的な回答傾向群として「親を信頼していない」とを加算してみると20.9%となる。

また、「親からどれくらい信頼されているか」との問に対しては、「信頼されていると思う」は全体の55.1%にしかならず、「親を信頼している」と「親から信頼されていると思う」との差が24ポイントにもなり、子どもが親を信頼している割合に比べて、親が自分を信頼していると感じている割合が低いことが分かる。子どもたちの複雑な気持ちが垣間見えるのである。

表11 親をどれくらい信頼しているか

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. とても信頼している	57.5%	34.3%	23.5%	39.0%
2. まあ信頼している	29.7%	45.0%	46.1%	40.1%
3. よくわからない	10.1%	10.2%	17.3%	12.3%
4. あまり信頼していない	1.7%	7.3%	7.6%	5.5%
5. ぜんぜん信頼していない	.9%	3.3%	5.5%	3.1%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

表12 親からどれくらい信頼されていると思うか

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. とても信頼されていると思う	25.0%	9.1%	9.0%	14.5%
2. まあ信頼されていると思う	38.1%	43.5%	39.9%	40.6%
3. よくわからない	24.4%	29.0%	30.5%	27.9%
4. あまり信頼されていないと思う	8.0%	12.8%	13.0%	11.2%
5. ぜんぜん信頼されていないと思う	4.5%	5.6%	7.7%	5.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

6) 家の手伝いなどの各種体験の状況

ここでは生活体験などの各種体験状況を調べるため、表13にあるような20項目を取り上げてみた。その結果を、わかりやすくするために因子分析を行ったところ4因子となり、それぞれを「家の手伝い群」「自然体験群」「人間関係群」「自由行動群」のように命名した。

各郡の特徴の概略をおさえるために、「家の手伝い群」については、「いつもしている・時々している」の積極的群と、「あまりしていない・まったくしていない」を合わせた消極的群に

大別し、各質問に対する回答割合が過半数を超えている項目を数え上げた場合、過半数を超えた項目数の数が6対4となる。項目数に対して直接確率計算を行うと有意な差は見られなかった ($p = 0.754$, 両側検定)。

自然体験群についても同様に「いつもしている・時々している」の積極的群と、「あまりしていない・全くしていない」の消極的群との項目数が0対5となり、直接確率計算によれば有意差がみられる ($p = 0.02$, 両側検定)。

「人間関係群」では、同様に積極的群と消極的群の項目数は3対0となり、全体の項目数が少ないため、有意差の検定は出来ないものの人間関係を大切にしている状況がうかがえる。

以上の考察から、自然体験などが際だって少ないことが指摘できる。

表 13 家の手伝いなどの各種体験の状況

		いつも している	時々 している	あまりし ていない	全くして いない	合計
家の 手 伝 い 群	1. 食事の準備やあとかたづけをすること	29.2%	43.1%	20.3%	7.4%	100.0%
	2. 買い物やおつかいをすること	8.7%	44.5%	32.5%	14.3%	100.0%
	3. 家で料理をすること	6.9%	35.8%	33.0%	24.3%	100.0%
	4. ペットの世話をすること	26.8%	31.5%	18.1%	23.6%	100.0%
	5. おふろのそうじをすること	14.4%	36.7%	25.0%	23.9%	100.0%
	6. 植木や草花の世話をすること	5.5%	23.3%	33.6%	37.7%	100.0%
	7. フトンやベッドの整理をすること	18.9%	36.2%	28.1%	16.8%	100.0%
自然 体 験 群	8. 家の中のそうじをすること	10.9%	43.2%	32.3%	13.6%	100.0%
	9. 洗たくをしたりたたんだりすること	8.9%	31.7%	35.1%	24.3%	100.0%
	10. ゴミをだしたりすること	12.7%	33.2%	29.5%	24.7%	100.0%
	14. 高い山などに歩いて登ったこと	3.3%	14.2%	45.1%	37.4%	100.0%
	15. 日の出や日の入りを見たこと	4.4%	18.9%	35.4%	41.3%	100.0%
	16. キャンプをしたこと	4.8%	21.2%	31.7%	42.3%	100.0%
人間 関 係 群	17. ボランティア活動をしたこと	4.2%	21.1%	38.0%	36.8%	100.0%
	19. お年寄りと遊んだりしたこと	5.2%	16.3%	35.7%	42.8%	100.0%
	11. 家族であいさつをすること	48.0%	25.1%	16.3%	10.6%	100.0%
自由 行 動 群	18. 小さい子と遊んだこと	18.7%	38.4%	26.7%	16.3%	100.0%
	20. 近所の人にあいさつをすること	39.3%	34.9%	16.3%	9.5%	100.0%
自由 行 動 群	12. 家族と離れてよその家に泊まったりすること	5.0%	26.0%	33.9%	35.0%	100.0%
	13. 電車やバスなどで友だちと遠くへ行ったりすること	10.0%	34.7%	29.4%	25.9%	100.0%

子どもの生活の現状と課題

7) 大人になることへの意識

①早く大人になりたいか

「早く大人になりたいか」の質問に対しては、「なりたい」が全体の28.0%、「どちらとも言えない」が51.2%、「なりたくない」が20.8%であった。その内訳は、「早く大人になりたい」の回答は、学年が上がるにしたがって減少し、逆に、「なりたいとは思わない」が増えていることが分かる。ただ、「どちらとも言えない」が、小学校5年生45.2%、中学2年生57.9%、高校2年生50.3%となり、子どもたちの複雑な心の変化がうかがえる。

表14 早く大人になりたいか

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 早く大人になりたい	34.1%	22.8%	27.0%	28.0%
2. どちらとも言えない	45.2%	57.9%	50.3%	51.2%
3. なりたいとは思わない	20.7%	19.3%	22.7%	20.8%
合計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

②大人になりたい理由

そこで、「大人になりたい理由」(表15)を聞いてみた。その結果、「大人になりたい理由」として割合の高かったものは、「やりたい仕事をしたい」53.0%、「親を楽にさせたいから」44.2%「好きなことが何でもやれるから」42.7%の3項目が、他の項目に比べて抜きん出ていることが分かる。

「やりたい仕事を早くしたい」は各学年を通して一位を占めており、大人になりたい理由の

表15 大人になりたい理由

	小学校5年生	中学校2年生	高校2年生	合計
1. 勉強しなくてよいから	13.9%	31.1%	21.7%	21.1%
2.好きなことが何でもやれるから	28.9%	45.5%	59.4%	42.7%
3. やりたい仕事を早くしたいから	57.2%	48.5%	51.4%	53.0%
4. 早く一人前にあつかってほしいから	20.6%	12.1%	17.4%	17.2%
5. 親を楽にさせたいから	55.7%	42.4%	29.7%	44.2%
6. 欲しい物が自由に買えるから	27.8%	37.1%	34.1%	32.3%
7. なんとなくになりたい	15.5%	12.9%	12.3%	13.8%
8. その他	11.3%	12.1%	15.2%	12.7%

共通点としてあげることが出来る。一方、小学校5年生では「親を楽しませたい」が55.7%となり、他の学年に比べて大きな割合を占めている。中学校2年生および高校2年生は、共通して「好きなことが出来るから」を上げ、自我の主張を意識し始めていることがうかがえる。

③大人になりたくない理由

「大人になりたくない理由」では、「子どもでいる方が楽だから」が全体の61.3%で一番割合が高かった。他の理由では、「大人になることが不安だから」が31.4%、「大人になって仕事や家のことがやっつけられるか自信がないから」が30.8%もあり、将来への不安は誰にでもあることであるが、「楽」を求める子どもたちの姿がうかがえる。

表 16 大人になりたくない理由

	小学5年	中学2年	高校2年	合計
1. 大人になると働かなくてはいけなから	24.3%	25.0%	16.7%	22.0%
2. 子どもでいる方が楽だから	60.0%	55.4%	68.4%	61.3%
3. 特にやりたいこともないし夢もないから	5.2%	12.5%	21.9%	13.2%
4. 大人はずいし自分勝手な人が多いから	14.8%	22.3%	21.1%	19.4%
5. 大人になって仕事や家のことがやっつけられる自信がないから	33.0%	25.0%	34.2%	30.8%
6. 大人になることが不安だから	35.7%	27.7%	30.7%	31.4%
7. なんとなくなりたくない	41.7%	26.8%	22.8%	30.5%
8. その他	27.0%	20.5%	16.7%	21.4%

8) 子どもの自己意識と自己判断

ここでは、「子どもの考えや行動の自己評価」に関する全21項目を、4段階評定尺度により分析した結果4つの因子を抽出することができた。それを、第1因子「積極性群」、第2因子「思いやり群」、第3因子「わがまま群」、第4因子「約束遵守群」と名付けた。質問項目を因子ごとに分類して、各質問項目に対する回答割合をまとめたものを表17に示す。

「積極性群」においては、「たくさんある・少しある」としてみると、「性格の明るさがある」が88.2%、「責任感がある」と「物事を自分で決めることがある」がともに73.6%と高く責任感や積極性がみられる反面、「あまりない・まったくない」としてみると、「人の前で意見などを言うことがない」(46.5%)、「新しいことを自分で考え出したりすることがない」(41.1%)などは不得手のようである。

「思いやり群」では、「他人を思いやる気持ち」、「人と協力して物事を行うこと」、「友だちの相談にのってあげたりすること」などは比較的高率であるが、その反面、「正義感がない」

子どもの生活の現状と課題

35.3%、「友だちの相談によってあげたりすることがない」26.1%、「人をいじめたりすることがある」20.4%などは2割を超え、思いやりに対して消極的と思える姿勢がうかがえる。

「わがまま群」においては、「人の好ききらいがある」が73.2%、「人にたよることがある」が70.2%、「自分はだめな人間だと思ふことがある」が57.7%、「食べ物の好ききらいがある」が57.6%、「自分中心的なところがある」が56.1%、「学校に行きたくないと思ったことがある」が53.5%などの比率が高く過半数に達しており、依頼心が強く自己中心的な子どもたちの姿が浮かび上がってくる。

「約束遵守群」では、「約束を守る」は9割近くが肯定的な回答をしているが、「親の言うことをきかない」が3割強、「まかされたことを最後までやりぬくことがない」は16.1%いることも明らかになった。

表17 子どもの意識と自己判断

		たくさん ある	少し ある	あまり ない	まった くない	合計
積極 性 群	1. 性格の明るさ	42.8%	45.4%	10.6%	1.1%	100.0%
	2. 物事を自分からすすんでやること	12.6%	51.2%	32.7%	3.5%	100.0%
	4. 責任感	24.0%	49.6%	22.4%	4.0%	100.0%
	6. 新しいことを自分で考え出したりすること	18.8%	40.1%	34.0%	7.1%	100.0%
	17. 人の前で意見などを言うこと	17.2%	36.3%	35.7%	10.8%	100.0%
	21. 物事を自分で決めること	21.8%	51.8%	23.0%	3.5%	100.0%
思 い や り 群	5. 正義感	15.0%	49.7%	30.1%	5.2%	100.0%
	9. 人と協力して物事を行うこと	37.1%	47.7%	13.1%	2.1%	100.0%
	10. 他人を思いやる気持ち	33.7%	53.1%	11.5%	1.7%	100.0%
	13. 友だちの相談によってあげたりすること	29.8%	44.0%	20.4%	5.7%	100.0%
	15. 人をいじめたりすること	3.0%	17.4%	37.4%	42.3%	100.0%
わ が ま ま 群	7. 人にたよること	19.3%	50.9%	27.4%	2.4%	100.0%
	8. 自分はだめな人間だと思ふこと	19.3%	38.4%	27.4%	14.9%	100.0%
	11. 人の好ききらいがあること	22.0%	51.2%	20.9%	5.8%	100.0%
	12. 自分中心的なところ	12.9%	43.2%	37.1%	6.8%	100.0%
	16. 生活が不規則なこと	15.0%	34.4%	32.4%	18.2%	100.0%
	19. 食べ物の好ききらい	23.4%	34.2%	23.9%	18.6%	100.0%
	20. 学校に行きたくないと思ったこと	20.5%	33.0%	25.0%	21.5%	100.0%
約 束 遵 守 群	3. まかされたことは最後までやりぬくこと	34.6%	49.4%	14.2%	1.9%	100.0%
	14. 親の言うことをきくこと	20.5%	48.8%	24.9%	5.9%	100.0%
	18. 約束をまもること	40.2%	48.4%	9.0%	2.3%	100.0%

2-2 子どもの意識と各種体験との関連性

家の手伝いなどの各種体験の状況（表13）と、子どもの自己意識と自己判断に関する内容（表17）とを比較し、それらの関連性を探っていきたい。

ここでは、群ごとに比較することとし、そのための方法として「たくさんある」を7点、「少しある」を5点、「あまりない」3点、「まったくない」1点と配分し、各群ごとに集計したものをさらに3分の1に分け、数値の高い方の層を「高層群」、低い層を「低層群」、その中間を「中層群」とした。

さらに、それらを平均値によって現したのが、以下の表である。

①積極性群と他の3群との関係について

「積極性群」（表17）と、他の「思いやり群」「わがまま群」「約束遵守群」とを比較してみる。まず、「積極性群」と「思いやり群」とを見ていくと、「低層群」1.51、「中層群」2.03、「高層群」2.50のようになり、積極性群の低層群から高層群に向けて平均値が高くなっていることが分かる。

同様に、「約束遵守群」とにおいては相互の関連性のあることがうかがえるが、「わがまま群」は逆方向を示し、この子どもたちには何らかの問題がありそうな結果となった。

表18 積極性群と、他の3群との関係

	思いやり群	わがまま群	約束遵守群
高層群	2.50	1.80	2.28
中層群	2.03	1.91	1.99
低層群	1.51	2.10	1.58
合計	2.03	1.93	1.96

②積極性群と、「家の手伝い群」などとの関係

さらに、「積極性群」と、表13にある「家の手伝い群」「自然体験群」「人間関係群」「自由行動群」との関係を見てみよう。

その結果、「積極性群」の数値が高くなるほど、「家の手伝い群」、「自然体験群」、「人間関係群」、「自由行動群」のすべてにおいて平均値が高くなっており、相互の関連性のあることが指摘できる。

表 19 積極性群と、「家の手伝い群」などとの関係

	家の手伝い群	自然体験群	人間関係群	自由行動群
高層群	2.29	2.25	2.47	2.20
中層群	2.03	2.05	2.16	2.19
低層群	1.75	1.78	1.79	1.99
合計	2.02	2.03	2.15	2.13

③わがまま群と、「家の手伝い群」などとの関係

次に、「わがまま群」を軸にして他の項目群との関連性を見ていくと、「家の手伝い群」、「自然体験群」、「人間関係群」とは反比例しており、「わがまま群」の子どもたちは、家の手伝いや自然体験などが少なく、人間関係もうまくいっていない様子が見られるのである。

ただ、「自由行動群」との関係は、家にいるのが何となく面白くなかったり、友だち関係がうまくいかないことなどが影響して、目的のないまま電車などに乗って移動しているのではないと思われる。

表 20 わがまま群と、「家の手伝い群」などとの関係

	家の手伝い群	自然体験群	人間関係群	自由行動群
高層群	1.94	1.90	2.01	2.29
中層群	1.98	2.04	2.09	2.15
低層群	2.13	2.14	2.27	1.99
合計	2.02	2.03	2.13	2.13

<わがまま群と、「家庭が楽しいか」との関係>

わがまま群については、少々問題がありそうな傾向にあることから、「家庭が楽しいか」とのクロス集計を行ってみた。

その結果は下表のようになり、わがまま群の数値の高い「高層群」では、「家庭が楽しい」23.7%、「どちらともいえない」38.3%、「家庭が楽しくない」53.9%のようになり、数値が高くなっていることが分かる。そして「家庭が楽しくない」は過半数に達しているのである。

また、わがまま群が低い「低層群」では、「家庭が楽しい」42.9%、「どちらともいえない」25.9%、「家庭が楽しくない」19.1%と、わがままの度合いが強いグループとは逆の方向性が浮かび上がってきた。

この結果、「家庭が楽しいか」と、「わがまま群」との関連性がみられ、家庭が楽しいこ答える子どもたちは、家のお手伝いをよくしていることなどを含めてみていくと、親子の信頼関係などが大きく影響していることが推察できるのである。

表 21 わがまま群と、「家庭が楽しいか」との関係

		問 12. 家庭が楽しいか			合計
		楽しい	どちらとも いえない	楽しくない	
問 5. わ がまま群 の 3 分類	高層群	250 23.7%	120 38.3%	82 53.9%	452 29.7%
	中層群	354 33.5%	112 35.8%	41 27.0%	507 33.3%
	低層群	453 42.9%	81 25.9%	29 19.1%	563 37.0%
合計		1057 100.0%	313 100.0%	152 100.0%	1522 100.0%

④家の手伝い群と他の3群との関係

さらに、「家の手伝い群」と他の郡との関係を見ると、全てが正比例しており、家のお手伝いなどをよくしている子どもは、自然体験や人間関係などが豊であることが分かる。

「自由行動群」とは逆の方向性を示しているが、前項の「わがまま群」に挙げた理由とは若干違いが感じられ、何らかの目的を持って移動しているのではないかと考えられる。

表 22 家の手伝い群と他の3群との関係

	自然体験群	人間関係群	自由行動群
高層群	2.37	2.52	2.28
中層群	2.04	2.03	2.16
低層群	1.63	1.72	2.07
合計	2.02	2.10	2.17

3 まとめと今後の課題

今回の調査から、子どもたちの日常生活の様子や体験活動の状況、家庭や学校の様子、友だち関係などの実態が明らかになり、併せて多くの課題や問題点も浮かび上がってきた。

子どもたちにとって安らぎの場でなければならない家庭が、3割の子どもたちは「家庭が楽しくない」と否定的な回答をし、「家庭が楽しくない理由」については、「親が口うるさい」「家族の会話が楽しくない」「自分を信じてくれない」などを挙げている。そして、「家庭が楽しい理由」として、「家族の会話が楽しい」「自分の話を親がよく聞いてくれる」を挙げていることからすると、家庭における楽しい会話ができる雰囲気づくりと、子どもの話をじっくり聞いてやる親の姿勢が求められていることが分かる。

学校生活においては、友だち関係が最も重要であることが明らかになり、子ども同士のよい人間関係づくりに向けた学校側の努力と、教師間のコンセンサスづくりが極めて重要であることを示唆しているのである。

さらには、遊び友だちや放課後の過ごし方などが限定されていることや、自然・生活体験不足なども判明し、また、依頼心が強く自己中心的ないわゆるわがままなどの度合いの強い子どもは、生活能力、思いやり、人間関係などにおいてマイナス傾向にあることも明らかになってきた。

そして、「早く大人になりたい」は3割弱、「わからない」と「なりたいとは思わない」を合わせると約7割が消極的な回答をし、「大人になりたくない」という理由の一位が、「子どもでいる方が楽だから」(61.3%)、以下、「大人になることが不安」(31.4%)、「大人になって仕事や家のことがやっていける自身がないから」(30.8%)、「なんとなくなりたくない」(30.5%)、「大人になると働かなくてはいけないから」(22.0%)などを挙げるのである。積極性があり明るくたくましく世界に通用する子どもたちの姿は、どうしても浮かんでこないのである。

最近、「学力の低下」が問題視されている。しかし、子どもたちの健康問題、自立心や社会性の欠如などに対する心配の声が湧き上がってこないのをどう理解したらよいのであろうか。また、厚生労働省の調査によれば、大学卒業者の就職後3年以内の離職率(平成12年)は36.5%に達しており、「仕事が自分に合わない」「人間関係がうまくいかない」などが辞める主な理由のようである。

今年の労働経済白書(厚生労働省)によれば、働かず、教育や訓練も受けていないいわゆるニート(NEET = Not in Employment, Education or Training)と呼ばれる「若年無業者」が増えており、その数は前年よりも4万人増えて、2003年には52万人に上るといふ。

前述したように「大人になりたくない理由」が、「子どもでいる方が楽だから」、「大人になって仕事や家のことがやっつけられる自身がないから」、「大人になると働かなくてはいけないから」などからみても、今の子どもたちは、学校を出たら仕事に就くことが当たり前であったこれまでの時代とは明らかな違いをみせ、将来に夢や希望がない、何をしたいのか分からない子どもたちが間違いなく増えてきており、ニート予備軍にならないことを切望するものである。

中央教育審議会は（「生涯教育について」答申：昭和56年）、「人間は、その自然的、社会的、文化的環境とのかかわり合いの中で自己を形成していくものである。現代の社会では、我々は、あらゆる年齢層にわたり、学校はもとより、家庭、職場や地域社会における種々の教育機能を通じ、また、各種の情報や文化的事象の影響の下に、知識・技術を習得し、情操を培い、心身の健康を保持・増進するなど、自己の形成と生活の向上とに必要な事柄を学ぶのである」と論じているが、今の子どもたちは、あまりにも限定された空間や人間関係の中だけで生き、地域社会と無縁の生活に大きな問題があるのである。これでは自立心や社会性は育ちにくく、広い視野を持つことすらままならないであろう。

人はどんな時代であっても社会から隔絶しては生きていけないし、社会の中で各人の能力が発揮され、自分の存在感が実感できる場や機会があるからこそ生きていけるのであり、もっと地域社会を意識した生き方が、今の子どもたちには特に必要なのである。

そのためには、現在の生活パターンを変えることが必要であり、「百聞は一見に如かず」「かわいい子には旅をさせよ」の諺の意味を再認識するとともに、今、保護者の意識改革と姿勢が問われているのである。